
四聖転生異聞 2 ~ 龍の少女誘拐事件 ~

瑞谷龍司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

四聖転生異聞2 ～龍の少女誘拐事件～

【Nコード】

N3509M

【作者名】

瑞谷龍司

【あらすじ】

見た目は美少女、中身は少年の吉川春海（龍風）が攫われた！？
新たな敵、そして四人の過去を知る人物が現れて・・・
四聖転生異聞、第二弾になります。

事始

授業が終わり、首を鳴らして立ち上がった。

今日も一日が長かった。いや、これからが本業なんだけどね。

「春海。帰るぞ。」

栗毛の可愛らしい美少女が振り返る。彼女の名前は吉川春海。同じクラスの女子だ。

「あ、秋人。ちょっと待ってて。」

小さな手で待つてのサインをすると、友達と何か話していた。

俺の隣で、友達の光洋がはあとため息をつく。

「いいなあ、秋人。」

ぼつ、と呟いた。その意味もわかっていたので、あえてスルーした。話し終わると、春海はばいばいと手を振って離れた。

「お待たせ。」

帰る支度をしている男子や、部活に行こうとしている男子がじろりと睨んできた。

その意味もわかってる。まあなんとなく・・・ごめん。

「じゃあ、俺も部活行くわ。」

光洋が名残惜しそうに俺たちに手を振って出て行った。

なんでこんなにクラスの男子から睨まれているかというところ、つい最近、俺らは付き合うことになったわけで。

女子男子ともに人気ナンバーワンの吉川春海と付き合うということとは、学校の男子を敵に回すということ。

命がけってわけじゃないけど、確かに風当たりは強くなった。

何故こうなるとわかって付き合ったかというところ、本気で好きだから、他の人がどう見てこようともそばにいたいから、とかではない。

俺と春海は、同じ運命を共にしているからだ。

いや、結婚とかじゃない。それは断じて違う。

だいぶ昔、二千年くらい前だったと思う。俺たち四人はある星の

元を集った。

闇を封じ、魔と戦うという、星の元に。

そう、それからずっと、三人の義兄弟とともに転生を繰り返してきた。

何度も違う時代、違う国に生まれ、そのたびに出会ってきた。

今回は平成の日本。目覚めた時はもう、俺は高校生だった。といつても、普段の生活はなんら変わらないんだよね。だって、俺は俺だもの。

それで、義兄弟の一人は、この可愛らしい少女に転生してたってわけ。

そう。こいつ、本当は心は男なんだ。

「ねえ、今度やる映画、面白そうなんだよねー。行かない？」
「そう可愛く言うが、頬、引きつってるよ。」

「・・・無理しなくていいんだけど。」

笑い出しそうになり、春海を見ないように目をそらした。

「うるせえ。自然なカップルを演じなきゃなんねえだろうが。」

ぼそりと春海が呟く。その目に一瞬、殺気が漲ってた。

なんでこいつと付き合ってる・・・というか、付き合っふりをしているかという、話は長いんだけどね。

俺たち四人は常にそばにいななければいけない。そのほうがパワーバランスが取れるし、やっぱりこいつらといるのが一番楽しいしね。ということで、付き合ってるって噂されてごちゃごちゃ言われるよりは、もう付き合ってるってことにしといたほうが早いってこと。

それで、俺は男子の目の敵にされちゃったんだけどね。

「そういえば、龍風。この前の美術の」

「うっかりそう呼んでしまった。ざらりと春海が睨む。」

「・・・やだなあ、春海って呼んで？」

顔は優しく笑っているが、目が笑っていない。びり、と空気が軋む音がした。

「・・・ごめん、春海。」

龍風というのは、春海の本当の名前だ。始まりの事前、つまり俺たちが転生するきっかけになった時の事前だった。

「美術のやつ？ ああ、これね。ありがとう。」

はい、と渡されたプリントには、白黒の虎が描かれていた。

「本当にお前、昔から絵、上手いな。」

誰も居ないのを確認してから、春海　龍風が言った。

「まあね。一応絵師だったこともあるし。」

確かに、これは良い出来だった。先生もびっくりして、個展を開けるとまで言ってくれた。

「特に虎の絵はお手の物だな、山彩白影殿？」

「そりゃ昔のペンネームってやつだよ。」

くすりと笑う。そこでこの日初めて龍風も笑った。

「それにしても・・・龍風、本当に絵、下手だね。」

ちらりと龍風の絵を見た。慌てて絵を伏せる。

「うつ、うるせえ！　俺はこういう細かいのは苦手なの！」

乱暴にカバンに絵をつっこむ。顔を赤らめているところを見ると、結構気にしてるらしい。

こういうところ、本当に可愛い。って、弟みたいだって意味だけだな。

龍風の肩を軽く叩いた。

「ねえ、今日は久々に羽伸ばして、見に行かない？」

「あ？　何をだ？」

俺は少し笑って言った。

「映画だよ。龍風は昔からそういうの好きでしょ？　玄清たちには俺からメールしとくからさ。」

きょとんとして目を瞬かせる。それから、みるみるうちに笑顔になった。

「本当か！？」

「うん。俺も見たいし。」

「行くっ！」

中身が龍風じゃなければすごく可愛いのに、と心の中でため息をついた。

嬉しそうに歩く龍風の後ろに俺もついて学校を出た。家とは反対側の駅の方面に向かう。駅前にサティが立っていて、その中で映画を上映しているのだ。

中は時間が時間だけに人ごみは無く、間もなく上映開始される映画を選んで中に入った。

選んだ映画は「ゾンビ」系ホラー。今話題になっている、ゲームから発展した映画だ。

そこで、ふと俺は思い出した。

龍風、ホラー系はダメなんじゃなかったっけ？

嫌な出会い

一時間半の上映が終わり、二人は中から出てきた。

虎瞬は楽しげに笑っているが、龍風はやつれたように顔を青くしている。

「龍風・・・大丈夫？」

「・・・ああ。」

ものすごい低いテンションで答えた。

何か聞いたそうな虎瞬をちらりと見やり、ふつと自嘲した。

「・・・ゾンビ映画だとは思わなかったんだ。名前から、てっきりコメディ映画かと思ってたから・・・」

「宣伝とかで見なかったの？ 今話題になってるから知ってるかと思ってたよ。」

「俺はあんまりテレビ見ないんだ。本の方が面白いしな。」

「ごめんね。知ってると思ったから言わなかった。ホラーを克服出来たのかと思ったからさ。」

「克服・・・ね。」

また深くため息をつき、苦く笑った。

「毎日がホラーなんだ、こういうときくらい日常を離れてと思ったけど・・・」

怖かった、と小さく呟いた。

「龍風はどつきりなのダメだもんね。」

「驚かす目的つてのが気に食わねえんだよ。悪意しか感じねえ。」
「けつと悪態をつけるまで回復しているようだ。虎瞬は少し笑って頭を撫ぜた。それを乱暴に振り払う。」

「さ、そろそろ時間だよ。帰ろうか。」

「はいはい。ホラーの次はまたホラーってか？ 楽しいねえ。」

相も変わらず不機嫌そうだったが、サティを出て歩き出した途端に声をあげた。

「つと。そうだ。」

「どしたの？」

きよろきよろと辺りを見回しながら答えた。

「悪い、先帰ってて。コンビニで買う物あるんだった。」

「一緒に行くよ？」

ぶ、と龍風が一時半ばに笑った。

「やめろよ、ガキじゃねえんだから。」

ふふ、と虎瞬も笑った。

「それもそうか。じゃあ、また後でね。」

「おう。先に行ってて。」

手を振って虎瞬と別れた龍風は、コンビニでお茶とスポーツドリンクの2リットルタイプを買って出てきた。男所帯では飲み物が特に早く無くなるので、買ってきてくれと雀景に頼まれていたのである。重い荷物を抱えて、辺りが暗くなり始めた帰り道を歩き始めた。カバンは虎瞬に持っていてもらったためいくらかは軽いが、それでも細腕の少女には結構な力を使う。

歩きながら、ふと龍風は鋭く目を細めた。

後ろから、三人ほどの足音がしている。

しかも、自分に合わせて遅くしているかのような足取りである。疲れたフリをして少しばかり足を緩めると、後ろの三人の足音も遅くなる。

間違いない。つけられている。

しかも、かなりあからさまに。

ぴた、と足を止めてその場を振り向いた。

そこには、三人の男たちが隠れることもせずに龍風を見ていた。

「・・・あたしに何か用ですか？」

見れば、いかにもガラの悪そうな二人がにやつきながらこちらを見ている。だが、気になったのはそいつらじゃない。

その中央に立っていた男。龍風の目はそいつに釘付けになった。少し髪の長い、赤茶がかった髪の男。それが嫌味無く似合ってい

る。まるでモデルのような背の高さと顔立ちは、人ごみを歩いてもその人とわかるほどに目立っていた。

あまりにも美しい青年が、優しい笑みをたたえてこちらを見ている。

だが、龍風は美しさに見惚れているわけではなかった。

男が放つ気配。それは普通とは違う、異端の匂いを感じ取ったからである。

そして、危険な匂いも感じ取っていた。

後ろにいた二人の男たちがにやにやしながら声をかけてきた。

「君、こちら辺の高校の子でしょ？ すっげー可愛いね。」

「いや、マジで可愛いって。ねえ、まだ六時だしさ、どうか遊びに行かない？」

龍風が警戒しているのを見て取って、男たちは笑った。

「大丈夫だって。俺ら悪い奴じゃないよ。」

くす、と青年が笑った。その瞬間、龍風の肌がぶわりと粟立った。

こいつ、やばい。

青年は穏やかに龍風を見つめている。

「ねえ、遊びに行かない？」

真っ直ぐに見つめたその目に、狂気の色を見た気がした。

「吉川春海ちゃん？」

「！」

ぎろ、と龍風は男を睨みつけた。

「なんであたしの名前、知ってるんですか？」

青年がまたくすりと笑う。

どう見てもこの男は普通じゃない。尋常な気配じゃない。けれど。

（こいつ・・・人間、か？）

妖にしては気配が違う。しかし、人間にしても少し違和感を感じる。この感じ、どこかで知っている気がする。

青年は笑ったまま一歩前に踏み出した。

「まあそれは・・・後で教えてあげるよ。」

「なっ!?!」

いきなり真後ろから龍風の口元に手が伸びてきた。まったく気配が無かったという油断から、龍風は抵抗できずに口を塞がれてしまった。

「しまっ・・・!」

くらりと視界が揺れる。急激に睡魔に襲われた。そしてこの、薬臭い臭いは。

（睡眠薬の類か!）

崩れ折れようとした膝を必死に支え、龍風は抵抗しようとして口元にまわされた腕を掴んだ。

「っ・・・この、くらい・・・で・・・」

殴ろうと拳を丸めようとしたが、まったく力が入らない。それどころか全身が縛られたように動かなくなってしまった。

これは激しい睡魔のせいではない。

（これは・・・金縛り術!）

どさりとその場で倒れたが、痛みも何も感じなかった。ただ意識だけは保とうとして男を睨み続ける。

男の違和感の正体がやっとわかった。

この気配、昔感じた陰陽師の気配に似ていたのだ。

「つてめえ・・・やっぱり・・・術、士・・・か・・・っ。」

にこりと青年が笑う。その笑顔を見ながら、龍風は深い意識の深淵へと落ちていった。

龍、帰還せず

龍風と別れたのが六時すぎ。遅くても七時前には帰ってくるだろうと思っていたが、時間はもう八時をとくに越えていた。

心配げに虎瞬がベランダから辺りを見回すが、気配は見当たらない。雀景もケータイを開いて確認するが一通も着ていなかった。玄清はゆっくりとコーヒーを飲んではいるもののどう見ても落ち着きが無い。

「おかしいな・・・何かあったら連絡入れるはずなのに。」

雀景がケータイを閉じて言った。

「ダメみたい。式も飛ばしてないよ。」

ベランダの窓を閉じて虎瞬がため息をついた。

「映画を見終わってから別れたんだろ？ もうとっくに家についていい頃なのに。」

雀景の言葉に虎瞬が頷いた。

それまで黙っていた玄清が立ち上がる。コートを手に取ると靴を履き始めた。

「ちよつと、玄清？ 何処行くんだ？」

「・・・探しに行つて来る。」

「つて、どこにいるかもわかんないのに？」

「待つよりはマシだ。」

「ちよ、玄清！」

雀景の言葉を待たず、玄清は外に出てしまった。

それを見て虎瞬がくすりと笑う。

「うちで一番心配性なのは玄清父さんだね。その次が雀景母さんかな。」

はあ、と深くため息をつく。

「うちで一番のんびり屋なのはお前だよ、長男虎瞬？」

「大丈夫だって。あいつなら何かあってもなんとかするよ。」

「でもよ・・・あれ、外見は女の子なんだぜ？　しかもかなり可愛い部類に入るし、か弱そうだし。」

くすくす、と虎瞬はおかしそうに笑った。

「でも中身は龍風だよ？　俺らの中で一番強いんだから。」

「まあ、そうだけどさ・・・」

「しかも一番好戦的。何かあつたら攻撃してるよ。」

ふと、雀景が何かを考えるように黙った。

「どしたの？」

「いや、そう考えると・・・もし誘拐されてた場合、誘拐犯が可哀相な目に合うんじゃないかねえかなあと。」

それまで笑っていた虎瞬もふと眉根を寄せた。

「その方がまずいかも。なら早く探さなきゃ。」

「・・・殺してないといいんだがなあ。」

「・・・保障は出来ないね。」

お互い顔を見合わせると、急いで玄関へ飛んでいった。

危険な男

意識の遠くから声が聞こえる。

まるで水の中から浮き上がるかのように意識が徐々に浮上していくのを感じた。

ふ、と自分の肉体と精神が重なった感覚がして、龍風は目を開けた。

薬を使われたからか頭がぼんやりとする。今の自分がどういう状況なのか把握しきれなかった。

「・・・ん・・・」

首を振って頭を起こす。それで、今何処にいるのかがわかった。

暗い、廃工場のようなだった。窓ガラスは所々割れて、冬特有の湿気を孕んだ寒風が吹いてきている。寒い。

ぶるりと身震いをして肩を掴もうとした。

だが、手が動かない。両手が後ろにまわされて縛られているようだ。しかも床で寝ていたらしく、下が酷く冷たいのも手伝って寒気が全身に回る。

それだけではなかった。気がつけば、先ほどまで来ていたコートもブレザーもセーターも無い。ブラウスとスカートのみの格好であった。

（こりゃ、寒いわけだな・・・）

身を起こして辺りを見回す。そこで、どうしてここにいるのかを思い出した。

四人の男たちがドラム缶の中に火をつけて暖を取っていたのである。そのうち三人は見覚えがある。

あの危険な匂いのする男もいた。

（あの見たこと無い男・・・あれが薬を嗅がせやがったやつか。おそらく・・・あのやばそうな男の術で気配を消してたな。）

一人一人を眺め、きゅ、と目を細めた。

（男三人はただの人間っぽいな。術士はあの男一人、か）

何事かを話している様子だが、注意深く見れば術士の男は会話に参加していないように見える。

その背を睨みつける。それと同時に男が振り返った。

龍風に気づくと爽やかに笑う。

「あ、起きた？」

にこにこしながら近寄ってきた。咄嗟に身構える龍風の肩に、自分が着ていたダウンジャケットを着せる。

「ごめんねー。寒かったでしょ。でも人間って寒いほうが早く起きるからさ。悪かったね。」

思いがけない行動に龍風は目を丸めたが、上着の暖かさは今はありがたい。仕方なく何も言わずに羽織ることにした。

「立てる？ 火のところ行こうか？」

男が肩を抱いて立たせた。触るな、と言いたかったが、寒さで口が動かない。言われたとおりにドラム缶の前に立った。

暖かい。体の震えが徐々に収まっていく。

「ほんとにごめんね。こんなに震えてるとは思わなくて。」

あはは、と男が頭を掻く。

「俺ね、南雲遼。遼って呼んでよ。」

にこ、と華やかに笑った。

まだ少しばかり歯を鳴らしながら龍風が呟いた。が、その声があまりに小さすぎて聞こえなかったようで、首を傾げた。

「え、何？ 何か言った？」

「・・・んだよ。」

遼が耳を近づける。ぎろりと龍風は睨みつけた。

「なんで、俺を攫った、のかって・・・聞いてんだよ。」

本当は頭突きでも食らわそうかと思っていたが、思うように体が動かない。

「ああ、そのこと？ まあ、いろいろとね。」

「な、んで・・・俺の名前、知ってる？」

ひゅーと男たちが口笛を鳴らした。

「すげえな。手え縛られて男たちに囲まれてんのに、全然びびってねえよ、この女。」

「つか『俺』って。うけるんだけど。」

「マジで可愛いな、この女。」

男たちに一喝しようかと向き直った瞬間、遼が男たちに歩み寄った。

その顔は深い海のような、危険な静けさを孕んでいた。

「今さ、春海ちゃんと喋ってるんだけど。静かにしてよ。」

そう言うが早いか、男たちを一瞬にして殴り飛ばした。

三人の悲鳴が聞こえる。倒れた男に容赦なく、腹にけりを入れている。

「ねえ、金は払ったんだしさ。早く出てってくれない？　つか、もしかして春海ちゃんを自分たちでどうにかしようとか考えてたでしょ。最悪ー。」

どず、どず、と不快な音が響く。その光景に龍風は叫んだ。

「おい、やめろって！　死んじまうぞ！」

ぴた、と遼の動きが止まる。くるりと振り返ったその無表情に、龍風は再び背筋が寒くなった。

「・・・君がそういうならしょうがないな。」

けりを止めると、男たちは悲鳴を上げながらよろよろと出口に走っていった。

その後姿を見ながら遼がぽつりと呟く。

「べつつに、殺しても良かったんだけどなー・・・」

ぞくりとして龍風は男を見た。

「お前・・・人の命をなんだと思ってるんだ？」

いかにもおかしそうにくすくす笑った。

「何、そんなこと考えてるの？　今さら人の命なんてどうでもないでしょ？」

龍風の前に立つと、覗き込むように目を見つめた。

「ああ、そういうことも言えないか。君らはずっと人間のために戦

ってきたんだもんね。」

びく、と体を震わせた。

「なんで、お前・・・俺らを知ってるのか？」

ふ、と笑う。その顔はひどく無表情に近かった。

「知ってるよー。四聖のことも、君のことも。龍風、だったよね。」

「！」

「君のこと知ってるよ。全部ね。聞いたんだ。」

誰に、と言おうとしたが、その前にぐいとあごを上になげられた。

何かを言うよりも抵抗するよりも、早かった。

遼の唇が、龍風の唇と重なる。

最初のキス

一瞬、何をされているのかわからなかった。

啞然としている龍風から口を離すと、につこりと笑った。

「こっこの、初めて？」

「な・・・なん・・・」

「君って白虎と付き合ってるって聞いたけど、あれは仲間でしょう？
さすがに古い仲間とはこんなことしないもんね？」

目を点にしている龍風にくすりと笑いかける。

「何度も転生してるから慣れてるでしょ？ それとも、そういう記憶も削除されてゼロからとかになるのかな？」

何をされたかわかった瞬間、龍風の顔が一瞬にして真っ赤に染まった。

「ってて、てめっ、なな、何、何・・・何を・・・」

「これってどうなの？ やっぱり女の子としてキスされた感じ？
それとも男同士って感じなのかな？」

「何・・・しやがるんだ、てめえっ！」

思い切りけりを放ったが、どうにも上手く足があがらない。普段とは比べ物にならないほど遅いけりに、遼は難無く避けた。

「へえ、すごいね。金縛りしてるのにそんなに動けるなんて。」

「ぼそりと何かを呟いた途端、龍風の体は再び動かなくなった。しかしそんなこともお構い無しに龍風は飛び掛ろうと息巻いている。」

「この、殺すっ！」

「ちょ、待つて待つて。そんなに怒るとは思わなくて。」

「キレるに決まってんだろおが！」

あれ、と遼はきょとんとした。

「もしかして、本当に初めてなの？ 龍風の記憶が戻る前に付き合
ったこととか無かったの？」

「あるわけねーだろ！ 殺すぞっ！」

「へえ、じゃあ俺が初めてなんだ。」

楽しそうに言う遼に再びけりを入れようとものがく。

「ふざけんじゃねえ！俺は男だ！」

ぶんぶんと後ろにまわされた手を振り回すがどうにも上手く上がらない。

「えー、でも見た目は女の子じゃん。しかもちよー俺のタイプなんだよね。」

「俺は男つつってんだろ！この野郎！」

「そーいう強気なところも好きだよ。」

ぶちぶち、と龍風の堪忍袋の緒がいくつも切れていく。

「このっ！」

今にも噛み付かんばかりに唸っている龍風を、またあの危険な瞳で見つめた。ぞくりとして身構える。

「君ってさあ、体は女の子で心は男の子なんだよね？じゃあさ、こんなのどうかな？」

しゅ、と空気が切り裂かれる音がした。

遼の手にナイフが握られている。

「て……てめえ……」

ぱらりとブラウスが左右に分かれる。ブラをつけた胸と腹部が露になった。

「……どうやら俺に殺されてえらいな。」

低く言った龍風のこめかみには、二本の青筋が見えている。

ふうん、と遼は片眉をあげた。

「別に見られるのは平気なんだ？男の子だから？」

「はっ。昔は夏は上半身裸の時だってあったんだ、こんくらいどうってことねえよ。」

ざまあみろと言わんばかりに笑う。

「ふーん……じゃあさ、これは？」

手を伸ばして触れようとしたその手を蹴り上げる。龍風の顔が赤から青く変わっていた。

「さっ、触んじゃねえ！」

「ああ、触られるのは嫌なんだ。」

楽しそうに間合いを詰めてくる。ぎりぎりと龍風は齒をかみ締めた。

「こいつ・・・ぶっ殺す！」

「騒がしいな。」

入り口から声が響いた。はっとして龍風が振り返る。

まず目に入ったのは、黒よりももっと黒い闇の色をした瞳。白髪
混じりの髪を後ろに撫でつけた老人だった。

不吉な再会

気味の悪い笑みを龍風に向けながらゆつくりと入ってきた。

「どうやら、任務は無事完了したようだね。」

にこ、と遼が笑みを返す。どうやら知り合いのようだ。

おそらく、遼を使つて龍風を誘拐させた黒幕なのだろう。

「ああ。無事に確保しましたよ。」

「傷はつけていないだろうな？」

上から下へと舐めるように見つめる。ぞぞ、と鳥肌がまた立った。

男はカバンから分厚い小包を取り出し、遼に押し付けた。

「報酬だ。とっておきたまえ。」

「いえ、それなんですけど・・・」

小包を手で押しやった。訝しげに老人が見やる。

「金はいらないんで、この子、くれませんか？」

「はあ!？」

思わず叫んだのは龍風だった。老人も眉根を顰める。

「どういうことだね。話しが違うじゃないか。」

「いえ、ドクターの協力はもちろんさせてもらいます。ただ、ドクターが欲しいのはこの子の力でしょ？ 俺は彼女自体が欲しいんです。だって面白そうでしょ。」

「ふむ・・・」

考えるように老人が口ひげに手を当てている。その間、龍風は喚きに喚いた。

「ふざっけんじゃねえよ！ くれるとかあげるとか、俺は物じゃねえんだってーの！ なめんな！」

さらに言い募ろうとした龍風の眼前を、老人の手が塞ぐ。

不思議な威圧感があり、思わず口をつぐんだ。

「・・・力は渡さぬ。だがそれ以外はいいだろう。私は『吉川春海』には興味が無い。あるのは『龍風』だけだ。」

再び顔も知らない人間に自分の名を言われ、龍風は戸惑った。

「なんで・・・お前ら、俺の名前を。」

にや、と気味悪く老人は笑う。

「おや、覚えてないかね？ 私は君に会ったことがあるよ。いや、知り合い以上だ。」

ぎろりと龍風が睨みあげた。

「どついう意味だ？」

「そうだね・・・十八世紀のことは覚えているかね？」

「・・・そんなとき俺らはイギリスに居た。」

「そうだ。そこで私は君に出会った。」

視線を逸らし、目を細めて思い出そうとした。

「十八世紀イギリス・・・その頃は俺・・・」

「思い出せそうかね？ ピーター。」

どくん、と鼓動が強く鳴った。耳に心臓がくつついているんじゃないかと思うほど強く、高く脈打っている。

「その名を・・・てめえが呼ぶんじゃねえ！」

叫んだ言葉は日本語ではなかった。驚くほど流暢な英語である。

にやあ、と老人は楽しそうに笑った。

「思い出したようだねえ、ピーター。」

周りに急に冷気が溢れ出した。殺気が、龍風から噴出しているのである。

龍風の顔が暗く翳る。老人を睨んでいるその目は、ぞっとするほど深い色をしていた。

「てめえ・・・ドクターブラッドか。」

「ご名答。ようやく思い出してくれたねえ。まあ、容姿が違うから無理も無いか。」

びく、と遼が身震いした。左腕が勝手に上がっていく。

慌てて右手で腕を押さえた。

「ちょ、ドクター。あんまり挑発しないでくださいよ。金縛りが解けそうだ。」

力を込めて腕を下に下げる。ぎりり、と龍風の手を戒めている縄がよりいっそうきつくなつた。

「この縄・・・呪言縄か。」

龍風が老人、ブラッドを睨みつけながら吐き捨てた。にこ、と遠が笑って答える。

「その通り。俺の靈力で縛ってるから、無理には引きちぎれないよ。」

「・・・どういうつもりだ？ あア？」

視線はブラッドを捕らえて離さない。その覇気にも動じず、にやりと笑った。

「だから言っただろう。私は君に興味がある、と。」

「てめえは確かに殺したはずだ。俺が、あのときな。」

「くつくつく。ああ、確かに殺されたよ。あれは痛かったな。」

さも可笑しげに笑うのを見て、龍風の殺気が強まった。

「まさかてめえ・・・俺の家族に何したか、覚えてねえわけねえよな？」

ああ、とブラッドは頷いた。

「覚えてるよ、患者のことは。顔も名前もね。君のお父上は確か、スミス・アシュフォード。母上はエレナ。長男はジャック。四人家族だったねえ。あれは確かクリスマスで、君はそう、所属している聖歌団が教会で唄を披露している最中だった。君のご家族は家を出ようとしていたところだったよ。ひどく驚いていたな。」

龍風の顔がみるみるうちに真っ青になっっていく。

その顔はまるで恐怖と殺意が入り混じったような、絶望の顔をしていた。

龍、墮ちる

「・・・やめろ。」

「最初は玄関で靴を履いていたミスターだった。首を掻つ切ったらそれで終わりだったよ。驚いて動けなかったんだろうね。ミセスがご息子を逃がそうとしたから後ろから刺してやった。その後はジャック君かな？ 泣く暇もなかったみたいだ。」

「・・・やめろ、よ。」

「その後は家に火をつけた。綺麗だったよ。雪の白に赤い炎が映えていてね。」

「・・・やめろ・・・やめろおお！」

ぶちん、と何かが切れる音がしたかと思うと、龍風は一直線にブラッドに殴りかかった。

咄嗟に遼が符呪を龍風の影に投げた。

龍風の拳がブラッドに当たる、その直前に符呪が影に当たった。

ぴた、と龍風の動きが止まる。産毛がふれているかいけないかの距離で、拳が止まった。拳の風圧で口髭がぶわりと揺れた。

「好戦的なのは変わらないね、ピーター。それが私が君を気に入った理由の一つだ。だが。」

にやりと笑うと、右手を龍風の額に当てた。

「それが君の欠点でもある。ほら、もう君は私の手の中だ。」

ブラッドの声が不意にぶれた。立っている足元も奇妙に揺れる。体から一気に生氣が抜けていく感じがしている。

「て・・・てめえ・・・つ。」

視界が暗転するのもわからぬまま、龍風はその場で倒れ臥した。それを見て遼が安堵の息をつく。

「ふうー。危ないことしないでくださいよ、ドクター。」

汗を拭いながら、破られた縄を見た。

「・・・結構キツめのやつだったんだけどなあ。」

「いや、あの青龍をこれだけ足止め出来たんだ、素晴らしい腕前だよ。」

ブラッドは屈みこむと、龍風の頭に手をやった。薄気味悪い笑みを浮かべながら何かを唱えている。

それを見て、遼が口を尖らせた。

「その子、壊したりしないでくださいよ?」

「安心しろ。壊したりなんぞしたら勿体無い。」

ブラッドが立ち上がるのと同時に、外から足音が聞こえた。

三人分の足音。遼はちらりと外へ目をやった。

その途端、二人の足元を赤い光が決る。

「つとと!」

「龍風!」

雀景が叫んだ。後ろに玄清と虎瞬が二人を睨みつけながら駆け寄ってきた。

あちゃー、と遼が苦笑した。

「どうしますー? ドクター! 四聖が揃っちゃいましたよ。」

「・・・私としては、青龍だけでいいのだがね。」

不機嫌そうに鼻を鳴らす。

「龍風!」

玄清は倒れている龍風を見て叫んだ。雀景も気色ばんで睨みつけた。

「お前ら、龍風に何しやがった!」

じろりと三人を見据え、ブラッドが口の端で笑った。

「・・・君たちも久しぶりだねえ。」

「ああ? 誰だ、あんた?」

訝しげに見つめる三人に、にやりと笑った。

「私だよ、ドクター・ブラッドだ。覚えてないかね?」

その名前を聞いた瞬間、三人は身構えた。それぞれから美しい光が輝き始める。

「あんた、あのマッドドクターか!?」

「ちつ。転生していたのか。」

「・・・」

その反応に気を良くしたのか、ブラッドは満足そうに頷いた。

「よく見ていなさい、諸君。君たちの可愛い弟、ピーターはもう、私の部下だ。」

そう言った途端、ぴくりと龍風が動いた。

ぎこちない動きで徐々に起き上がり、ふらふらと立ち上がった。

その目は、どこも見ていない、空虚な瞳と成っていた。

「龍風！」

玄清の呼びかけにもぴくりとも動かない。雀景も呼びかけたが、いつもの龍風の笑みが顔に浮かぶことは無かった。

やられた、と玄清は鋭く舌打ちした。

最も厄介な龍風が、相手側に落ちてしまった。

取り戻す為の戦

「……たの？」

それまで黙り込んでいた虎瞬が、ぽつと呟いた。

その途端、工場全てを包みこむような巨大な殺気が虎瞬から溢れ出した。反射的に玄清と雀景は虎瞬の後ろに跳び退った。

「おい、虎瞬？」

しっ、と玄清が雀景を止めた。

「今、虎瞬に話しかけるな。死ぬぞ。」

いつものほわんとした空気はどこにもなく、虎瞬はぎらりと遼とブラッドを見つめている。

虎瞬の腕が上がる。人差し指が、龍風を指していた。

「誰が、やったの？」

殺気に反して、声はあどけない。それがぞくりと寒気を誘う。

「なんだね？」

ぽつ、とまた虎瞬は呟いた。

「服。龍風を傷つけたのは、誰なの？」

龍風のブラウスが左右にはだけ、中が丸見えている。それを言っているようだ。

がりがりと遼は頭を掻いた。

「あー……それ、俺だけど。でも傷つけては」

そう言い終るより早く、遼は自分の腕で顔をガードした。

目を光らせた虎瞬が、すでに遼に殴りかかって来ていたからである。

「ちょ、と！ 早っ！」

「君が傷つけたの？」

返事を聞く前に再びストレートを入れてきた。慌てていなして距離を取る。

「だからっ……あー、ダメだ。この人、聞こえないみたい。」

目を丸めながら飛び掛ろうとしている様は、本物の虎のようであった。わずかに、呼気から唸り声も聞こえる。

「ドクター。なんとかしてよー。」

ふむ、とブラッドが声を出した。

「ピーター。いや、龍風。行きなさい。」

再び遼目掛けて飛び掛ってきた虎瞬を止めたのは、龍風だった。

「！ 龍風！？」

慌てて虎瞬が動きを止める。だが、龍風は容赦なく虎瞬の右の頬を殴り飛ばした。

「つつう！」

飛ばされた体を空中で回転させ、見事に着地した。驚きで目を瞬いている。

「りゅ、龍風！？ どうして・・・」

その言葉が終わる前に、龍風の右拳が虎瞬の腹にぶち当たる。

「ぐはっ！」

不意を突かれ、思わず体を折り曲げた。その瞬間に頭が思い切り蹴り飛ばされる。

派手な音がして、虎瞬は廃材の中につっこんでいった。

「虎瞬！」

驚いて虎瞬が飛んでいった方向を見やる。そこには、いつの間にか龍風が身構えていた。

「っ！ くそっ。」

雀景が瞬間的に翼のような赤い光を盾にした。ばちちつと電気が走るような音が響く。

弾けるように龍風は飛び退いた。息を切らしている雀景の隣に玄清が寄った。

「大丈夫か？」

「あいつ・・・本気で殺しにきてる。」

苦笑して汗を拭った。先ほどからずっと冷や汗が止まらない。

龍風の殺気に当てられ、噴出しているようだ。

「・・・完全に意識操作をされてる。今の俺たちじゃあいつは止められない。だが・・・」

ちら、とブラッドを見た。

「術士を倒せば、何とかなるはずだ。」

横から風を切って飛んできた蹴りを避け、玄清がぼそりと言った。

「おそらくブラッドが操者だ。俺が龍風をひきつけるから、お前がブラッドをやれ。」

「・・・頼んだ。」

無茶だ、とは言えなかった。本気の龍風を前にしては、自分たちは敵わない。それをわかっていて、玄清は提案したのだ。

「早めにけりつけてやる。それまで持ちこたえてくれよ。」

「ああ・・・自信はないがな。」

飛び掛ってきた龍風を、玄清の白銀の盾状の光が防いだ。その間に雀景はブラッドに向かって走り出す。

遼がにやりと笑いながら聞いた。

「ドクター、どうやらあんた狙いらしいですよ?」

悠々とブラッドは笑った。

「あれで龍風が止められると思ってるのかね・・・つくづく四聖は甘い。」

「ブラッドオオ!」

雀景がブラッド目掛けて拳を繰り出す。そんなときでも、ブラッドは酷薄な笑みを絶やさなかった。

「地に落ちた愚鳥めが。」

「っ!」

あと三步、というところで、雀景が体勢を崩した。

どさり、とその場に倒れ伏せる。

その背中が、袈裟懸けに斬られていた。

龍風のかまいたちに斬られたのだ。

すべて破壊す

「ごふ、と雀景が血を吐いた。かなり深く抉られたようだ。

「雀景！」

玄清が呼んだが、それ以上そちらに気を向けるわけにはいかなかった。

龍風の右腕が縦に振られる。それだけで、いつもの龍風と比べ物にならないほど強烈なかまいたちが放たれる。

受けきれるものではない。慌てて玄清はバックステップで避けた。と、ぴたりと龍風の動きが止まった。視線は相変わらずどこかを向いている。

しかし、玄清は感じていた。

巨大な力の塊が、龍風に集まっていくのを。

その間に攻撃しようにも近づけない。いわば、今の龍風は歩く台風である。

玄清も力を溜め始めた。もう傷つけず正氣に戻す手は無い。力づくで止めるしかない。

「・・・悪く思っな。」

すう、と玄清の瞳が白銀に光った。いや、体全体が光りだした。

そのとき、不気味な笑いが響いた。ブラッドがいかに楽しそうに笑っている。

「ふふつくく・・・そんなことしても無駄だよ、玄武。見てごらん。」

指差された方向には、龍風がいた。

驚きで息が止まった。

ばち。

ばちばち。

びりいつ。

紙を破くような音。

まさか、と玄清は愕然とした。

青い光に包まれている龍風の周りで、一際輝く線状の光が音を出している。

あれは、電気だ。

雷にも似た強力な電気が龍風の周りに集まってきている。

「な・・・バカな・・・」

そんな能力は龍風は持っていなかったはず。ずっと共にいてわかってきた。だからこそ、ここで初めて能力が開花するなど信じられない。

ブラッドの目に狂気が宿る。

「君たちは知らないだろうけどねえ・・・君たちは本来の力の三割程度しか使っていなかったのだよ。己の実力はここまでと決めてしまっているようだね。まったく、もったいない話だ。」
ぐつぐつと笑い声がした。

「君たちにはまだ目覚めていない新たな能力がたくさんあるはずだ。どうだね？ 私がその力を引き出してやっても構わんが？」
寒気がするような瞳で玄清をねっとり見つめる。

「そうすれば君たちも助けてやろう。我が手足となるなら、な。」

「・・・」

ぎろ、と玄清がブラッドを睨んだ。その瞳に、好意などひとかけらも存在しない。

「・・・あのときも、貴様は同じことを言ったな。俺たちの答え、覚えているか？」

それを聞いた途端、ブラッドの顔が醜く歪んだ。

「・・・答えはノーと言うわけか。よからう。龍風。」

もはや電気の塊を宿しているように、龍風の周りでは電気が激しさを増している。触れれば焦げてしまいそうだ。

「殺せ。」

頷くでもなく、龍風は右手を玄清に向けた。

瑠璃色の閃光が玄清を貫いていった。

龍去りてその後

がら、と廃材が動いた。

中から虎瞬が頭を抱えながら這い出てきた。頭から血を流しながらうすぼんやりとする視界を拭う。

「てて・・・」

痛みで呻きながら辺りを見回す。そこで、目を見張った。

雀景が血溜りの中で倒れてぴくりとも動かず、玄清は服が黒こげになって倒れている。

「雀景・・・玄清！」

頭の痛みもどこかに吹っ飛んだ。慌てて二人に駆け寄る。

「雀景！」

背が日本刀で斬られたように抉られている。

しかし、致命傷になるような傷ではなかった。

とりあえず、自分の服を脱いで雀景の体に回し、止血帯の代わりとした。

その痛みに雀景が目覚める。

「うつ・・・つ・・・」

「雀景!？」

ほっとして声をかけると、雀景は青い顔をしながら笑った。

「ああ・・・無事か、虎瞬。」

「雀景のほう为重傷だよ。」

それだけ言うと、今度は玄清のところに走った。

焦げ臭い匂いが立ち込めている。が、本人はさほど焦げているようには見えなかった。火傷はあちこちにあるがそんなに酷いものはなさそうだ。

「玄清？ 大丈夫？」

ゆさゆさと揺さぶると、玄清が不機嫌そうに目を開いた。

「・・・虎瞬か？」

何故起こすとも言いたげな声。

「相変わらず寝起きが悪いなあ・・・痛いところはない？」

その問いで目が覚めたようで、身を起こして自分の体を眺めた。

「・・・無事だ。」

「よかった、焼蛇亀なんてまずそうだもんね。」

いつもならここで皮肉の一つでも返してくるのだが、玄清は啞然として黙っている。

「誰にやられたの？ ブラッド？」

火炎放射器で燃やされたの？ と言おうとしたが、真剣な表情を見て口をつぐんだ。

「何故・・・無事なんだ？」

「え？」

「あいつは殺せと命令されたはずだ・・・だが、火傷程度で済んでいる・・・」

「あいつって・・・龍風？」

頷く玄清を見て、雀景が言った。

「俺もだ。アイツ、加減してた。」

「そういえば・・・俺も、ふつとんだけどそんなに痛くなかったな。」

三人は黙り込んだ。それぞれが考え込んでいる。

その沈黙を破ったのは、雀景だった。

「とりあえずさ・・・病院行つていい？」

さきほどから止血したところから血が滲み出ているのだ。顔色も青から白に変わりそうである。

「あつ、ごめんね。」

あはは、と笑う虎瞬に、恨みがましそうな視線を寄越した。

「忘れてたな。」

「いえいえ、とんでもない。」

玄清が立ち上がる。ぼろぼろの服をなんとか形にして身なりを整えた。

「いいから、さっさと行くぞ。龍風のことは後だ。」
二人も立ち上がった。よろよろと出て行く玄清の後を追う。
朝日が昇るには、まだ早い時間のことだった。

操り人形

まだ月がわずかに光っているものの、もう夜明けは近い。

その微弱な月光は、龍風の横顔を照らしている。

テレビに出てきそうな男性物の中国服に身を包んだ龍風は、まるで大きな人形のようにであった。

いや、人形そのものである。

瞬きもせずどこかを見たままぴくりとも動かない。

その姿を、じつと遼は見つめていた。

「ほんと、人形みたいだな。」

ふう、と息をついた。自分の言葉に苦笑する。

「いや、もうドクターのお人形だもんな、君は。」

ベッドの上で糸が切れたように座り込んでいる龍風に声をかけた。

「・・・壊すなって言ったのにね。」

椅子に腰掛けながらコーヒーを口にした。

ブラッドに言われ、遼は龍風のお世話係になった。というより、自ら引き受けた。

だが、お世話しようにも人形のような龍風から世話をかけられることもないので、所在無げにコーヒーを飲むしかなかったのだ。

肉体である『吉川春海』は自由にしているとは言われた。が、抜け殻のようになった龍風をどうしようとは到底考えられなかった。

「俺は元気な龍風ちゃんに興味があったんだけどなあ。」

それにも答えず、龍風はただどこかを見つめているだけである。

「ねえ、覚えてない？ きみ、自分の手で仲間を殺しちゃったんだよ？」

「・・・」

何の反応も無い。はあ、と再びため息をついた。

「つまらないな。」

コーヒーカップを掴んで立つと、部屋の扉を開けた。
「俺、隣にいるからさ。何かあったら呼んでよ。」
半分冗談半分願いを込めて、遼は苦笑して出て行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3509m/>

四聖転生異聞2 ～ 龍の少女誘拐事件 ～

2010年10月8日12時58分発行